

R. Z. ベッカーのフランス革命批判

田口 武史

R.Z. Beckers Kritik an der Französischen Revolution

TAGUCHI Takefumi

Abstract

Rudolph Zacharias Becker, einer der prominentesten Volksaufklärer und einflussreicher Volksschriftsteller am Ende des 18. Jh., spielte nach der Französischen Revolution als konservativer patriotischer Journalist eine wichtige Rolle.

Eigentlich wollte er die Bauern aufklären, um ihre Lebensverhältnisse zu verbessern, jedoch distanzierte er sich in dem neuen politischen Kontext nach den Aufständen des Nachbarlandes von seinem ursprünglichen Ansatz. Ordnung und Ruhe innerhalb der deutschen Unterschicht wurden seine höchste Priorität, so dass er die Revolution von unten gänzlich ablehnte. Seine journalistische Tätigkeit zeigt immer deutlicher seine latente nationalistische Intention. Seine Adressaten waren nun nicht mehr die Bauern, sondern die aufgeklärten Bürger, die keine rasche Veränderung der Gesellschaft wollten. Becker konnte sich deshalb ihrer Unterstützung sicher sein. So näherte sich die deutsche Aufklärung in ihrer Endphase den Nationalismus an.

はじめに

ドイツ民衆啓蒙運動の最も重要な指導者のひとり、R. Z. ベッカーは、バステューユ監獄襲撃の知らせを啓蒙の成果として、まずは好意的に受け止めた。ところが革命の暴力的な実態が明らかになるにつれ、彼は断固たる反革命論者へと変わっていった。こうした支持から反対への態度変更は、ドイツの知識人たちがフランス革命に対して示した典型的反応と言えよう。しかしベッカーの場合、この転向には他の人々とは異なる意味があった。というのも彼は、啓蒙市民を中心とする一般読者に対して相当の発言力を持つ人物だったからである。1784年に自ら創刊し、自前の出版社で編集発行していた週刊新聞「ドイツ新聞」(*Deutsche Zeitung*)ⁱのジャーナリストとして、また1788年に民衆向け啓蒙書『農民のための救難便覧』(*Noth- und Hilfsbüchlein für Bauersleute*)をものし、28,000部を普及させた当代きってのベストセラー作家として、彼は広く世論に働きかけるだけの知名度と手段を有していた。ⁱⁱ

ベッカーは農民と都市下層民を相手にする啓蒙家として、まさに当事者としてフランス革命をめぐる議論に加わらねばならない立場にあったと言えよう。もっとも民衆の政治的教育は、彼の啓蒙プログラムに組み込まれていなかった。民衆啓蒙運動の主目的はあくまでも、貧困層を生活面において啓蒙し、自助努力による境遇改善を図り、社会不安を取り除くことにある。つまり、むしろ民衆を政治からできるだけ遠ざけておくためにこそ、ベッカーは彼らに衣食住や労働の技術を伝授しようと試み

たのだ。とはいえ、隣国の政情不安を知ったドイツの為政者や市民たちが、民衆啓蒙運動によってドイツの民衆が刺激され、政治的に覚醒してしまうのではないか、農民一揆を誘発するのではないか、と警戒心を抱く可能性は十分にあった。フランス革命に対する世論がどう動くかによって、ようやく軌道に乗り始めた民衆啓蒙運動の将来も、文筆家、ジャーナリストとしての立場も左右される差し迫った状況に、ベッカーは身を置いていた。

しかし結果的に、ベッカーはこの難局を乗り切ること成功する。それどころか、フランス革命勃発後に『農民のための救難便覧』の売れ行きは急激に伸び、1789年から1791年の間に6万部も刊行されている。一方「ドイツ新聞」は、フランス占領下の1812-13年に発禁処分を受けたが、何度か名前を変えつつ危機を脱し、ベッカーの死後1848年まで存続した。ベッカーはフランス革命批判と愛国的言説によって世論を味方に付け、逆風を強力な追い風に変えたのだ。こうした言論活動が災いして、彼は後にフランス占領軍によって逮捕監禁されるのだが、この事件はベッカーが——現代ではほとんど忘れ去られてしまっているのだが——当時のドイツ言論界において看過すべからざる影響力を持っていたことの証に他ならない。

フランス革命後のベッカーの発言が少なからぬ反響を呼んだとするならば、彼の主張とその変化を通して、当時のドイツ世論の流れを窺い知ることができるであろう。そこで本論は、まず革命直後にベッカーが「ドイツ新聞」に発表した記事を対象に、彼が読者に対してどのようなメッセージを送ったかを検証する。さらに、その後の文筆活動において、彼のドイツ国家あるいはドイツ民族に対する意識が顕在化してゆく過程を指摘したうえで、獄中記『フランスによるルードルフ・ツァハリャス・ベッカーの17ヶ月にわたる監禁、その苦しみと喜びの手記。独裁政治の特徴に関する論考』ⁱⁱⁱで、ベッカーが最終的にナショナリズムに接近していった様を描き出す。

1. なぜ革命報道が遅れたか

ベッカーは1789年10月2日発行「ドイツ新聞」第40号で、バステューユ監獄襲撃の第一報を伝えた。記事に先立って、クリスティアン・ガルヴェの著作『モラルと政治の結びつきについて』(*Über die Verbindung der Moral mit der Politik*)の一節を引用し「不完全な状態は変わりうる、これが自然の理である。成熟と完全性が達せられた時点ではじめて、変化がなくなるものだ」(*Deutsche Zeitung*, Jg.1789, S.337)と指摘しているのだが、この部分にすでに、革命に対する肯定的評価が示されている。農民の啓蒙を通して、より安定した、より豊かな、より幸福な社会の実現を目指す彼を支えていたのは、「人間は完全性へ向けて常に改善改良に努めるべきだ」という信念、そしてまた、「完全への志向は獣ならぬ人間に生まれつき備わった性質である」という信念であった。それゆえ彼は、フランスで起きたクーデターを、不完全な政治体制を改善するための必然的事件、人間の完全志向に促された行動と見なし、是認した。そのうえで、次のようにフランス革命についての言及を始める。

フランスにおける大臣貴族による独裁政治の廃止、この王国のこれまでで最も重要な、この国民においてはまったく予想もされなかった、そして他の国々にとっては最も教訓的な国家変革は、今や、平和的に終息することが見込めるところまで進行してきた。フランス国民が、望ましい、より良い状態ではなく、完全なる無政府状態と大混乱に陥るかもしれない、という恐れもかなり薄れてきた。そうしたわけで今は、もっとおちついてこの件について語れるようになったのだ。

(*Deutsche Zeitung*. Jg.1789, S.337f.)

フランスにおけるクーデターの推移は、他の新聞や私信、流言などによって断片的ながら刻々と伝えられ、すでにドイツ中の耳目を集めていた。ところがベッカーは、10月になってようやくバスティーユ監獄襲撃の事件を取り上げた。「ドイツ新聞」は、当時流行していた道徳週報 (*moralische Wochenschrift*) の流れをくむ新聞であり、事件をいち早く報道するのではなく、ドイツ各地と諸外国で起きた事件を啓蒙的観点で取捨選択、評価、解釈したうえで紹介し、読者に教訓を与えることを目的としていた。タイムラグが生じた一つの理由は、この編集方針に求められよう。^{iv}

しかしながら、隣国の歴史的な大事件について2ヶ月半も沈黙しているのは、いかに道徳週報であっても、やや不自然に思われる。たとえば、教育家 E. C. トラップらが発行する「ブラウンシュヴァイク・ジャーナル」(*Braunschweigisches Journal*, 1788-1791) では、やはり著名な教育家である J. H. カンペによる現地取材を「革命時代のパリ通信」^v という表題で、すでに8月4日から連載している。このブラウンシュヴァイク・ジャーナルもやはり教育的意図に基づいて発行されていたことに鑑みると、なぜベッカーがもっと早くに革命報道をしなかったのか、疑問が生じる。

上の引用箇所が続いて、ベッカーは「ドイツ新聞」のバックナンバー、1789年1月30日発行の第5号に掲載した記事を参照するよう、読者に指示している。この第5号でベッカーは、三部会招集までの経緯を中心に、1788年のフランスの政治動向を小さな活字で延べ8頁にわたって報告したのだが、各種建白書が提出された期日、その内容、相手方の応答など、かなり詳しい内容となっている。しかも同じく第5号の記事で、「残念ながらまだおそらく、としか言えない、まだ成就していないフランスの国家変革について、かくも事細かに申し上げたのは、それがこの年の最も重要な、ひょっとしたら今世紀で最も重要な事件だと思うからだ」(*Deutsche Zeitung*. Jg.1789, S.41) とコメントしている。ベッカーがフランスの政治動向に革命以前から並々ならぬ関心を寄せ、情報収集に努めていたことは疑いない。それにもかかわらず、彼はなぜ沈黙を続けたのか。

この疑問を解く手がかりは、ベッカーが新聞に書かなかった出来事にある。すなわち、フランスの農民、民衆の動きである。1789年1月30日の記事には、パリにおける政治中枢の動向が詳細に報告されているのに対して、フランス各地で起きた都市下層民の暴動や農民一揆については、奇妙なことにほとんど触れられていない。

民衆の起こした騒乱が報じられたのは、ようやく1789年7月3日発行、第27号であった。せっかく開かれた三部会において早くも深刻な意見対立が生じたことを報告したのち、次のように記している。

その間に王国の多くの地方で、憂慮すべき騒乱が発生した。パンの価格高騰が主因である。一般に普及した自由の精神、これまでよりも良い政府への渴望も、少なからずこの事件に関わっているのではあるが。トゥーロン、セット、エクス、マルセイユ、モンペリエ、アラス、アルル、ソリュ、ニーム、カン、そのほかの町では、暴徒によって本当の反乱がおきてしまい、パリではある裕福な壁紙工場主の家がならず者によって襲撃され、打ち壊された。その際100人以上の人が、軍隊によって射殺された。(*Deutsche Zeitung*. Jg.1789, S.227)

食料高騰に不満を募らせ、反乱を起こした人々をベッカーは「暴徒」あるいは「愚民」を意味する Pöbel、あるいは「ならず者」を指す Jan Hagel と呼ぶ。彼らをまっとうな人々としては扱わず、さらに射殺された人々に対しても、それが当然の報いであるかのように何の同情心も示していないのだ。ベッカーは、このような自然発生的な民衆蜂起に対して、最初から全否定の姿勢で報道した。たとえ自由の精神やより良い政府を願う気持ちが蜂起の動因となっていようとも、治安維持のほうが優先される、というのが彼の根本的判断であったことは明白である。さらに、この7月3日の記事においてもなお、農村における領主への反抗については依然として何も語られていない。1789年の夏には、前年から引き続く凶作と飢饉に苦しんだフランスの農民が、パリにおける平民の反乱に勢いづけられて、領主の館や役所を襲撃し、借金証書を焼くなどの実力行使にでた、〈大恐怖〉とよばれる一連の騒動が激化したのだが、本稿で最初に取り上げた1789年10月2日の記事、革命勃発の知らせには、やはりこの件についてのコメントはない。詳しく報じられているのは、いかにしてバステュー監獄襲撃にまで至ったのか、7月14日のパリでなにが起きたのかという点だけである。

これらの資料からだけでは、ベッカーが一連の農民一揆を隠匿するつもりであった、とまでは断定できないのかもしれない。しかし農民を相手に啓蒙活動を展開しているベッカーが、フランスの農村で頻発する抵抗運動に無関心であったとも考えられない。そうであるならば、農民一揆をフランス革命の一環として報じることを意図的に避けていた、と解釈するのが妥当ではないか。少なくともベッカーは、革命をもっぱら政治闘争、つまり党派間の主導権争いとして報じるばかりで——民衆の反乱は、まるで政府の動揺に乗じた火事場泥棒のように描かれている——下からの革命という見方を提示しなかった。

先に「今はもっとおちついてこの件について語れるようになったのだ」という発言があったが、これは「人間と市民の権利の宣言」が起草され、貴族が自分たちの特権を放棄することを決断し、新しい憲法制定へと動き始めたこと、それに伴って民衆による騒乱も終息しつつある状況を受けての発言だと想定される。これから先は革命が平和裡に進行すると判断して、ベッカーはようやく沈黙を破った。それまでの二ヶ月半の間、パリの騒擾が地方に波及し、農民一揆が続発する事態を、彼は固唾をのんで見守っていたに違いない。この時期に民衆啓蒙家たる彼が革命について語ることは、確かに困難であった。不用意に革命への賛意を表明すれば、農民一揆を是認しているかのように受けとられる危険があり、逆に反対すれば、これまでの民衆啓蒙運動における主張との齟齬が非難されるかもしれないためである。革命を啓蒙精神の実現と評価しつつ、しかも民衆の反乱をきっぱりと拒否できるタイミングを待っていた、それが二ヶ月半遅れの革命報道となった理由であろう。

2. 啓蒙と愛国心

読者は、民衆の怒りの恐ろしい爆発を、権力者の側による人間のもっとも神聖なる権利の抑圧と同様に、認めはしないであろう。(Deutsche Zeitung, Jg.1789, S.338)

独裁政治を廃し、よりよい社会を求める政治的試みとしてのフランス革命は、人間の完全性指向に基づく行動、啓蒙思想に基づいた行動として評価しうるが、どんな理由があるにせよ、その手段としての民衆蜂起は決して許されない、ベッカーは革命の最初期から、この見解を明確に打ち出した。ベッ

カーの革命是認はあくまでも理念としての革命に対してであり、現実の武力クーデターに対してではなかった。それゆえ彼の書く記事はいつも、暴動の原因たる失政の分析、フランス王政の不完全性に対する批判に終始した。政治の不手際と権力者の墮落に焦点を合わせることで、不完全なものは改善されるべきであり、また改善される運命にある、という革命の啓蒙的側面のみを読者に示したのである。

しかしフランスで進行しているのは単に急進的な政治改革や政争なのでなく、社会構造を根本から覆す階級闘争であることを、ベッカーははっきりと認識していた。革命以前の1789年1月30日の記事にも、すでにその事実を窺わせる発言がある。

ドイツでは、下層の市民と農民も、自分の国家市民としての諸権利をよく心得ているので、フランスにおけるような動きは起こりようがない。我々はフランス人の置かれているような圧政のもとにあるわけではなく、そしてまた全体としてすでに至るところで、我々の分別と我々の市民的忠誠心が許す限りにおいて、この諸権利を享受しているからである。なんとなれば、民の自由は、必然的にはほとんどいつもその民の精神的完全性と釣り合っているからだ。(Deutsche Zeitung, Jg.1789, S.42)

18世紀末において、政変の恐れがないほどドイツの民は解放されていた、という認識はもちろん過大評価である。プロイセンはフリードリヒ・ヴィルヘルム2世の治世で言論の自由が再び制限されるようになっていた。またそれ以前の、フリードリヒ2世の晩年においてさえ、反動政治の傾向が現れていた。さらに、矢継ぎ早に啓蒙思想に基づく国家改革を進めていた、ハプスブルク家のヨーゼフ2世の政治もやはり、行き詰まりを見せるようになっていた。しかしここで重要なのは、ベッカー自身が、ドイツの政治が常に良い方向に向かっている、と確信していたことである。貧しい下層市民出身の彼は、言論の力だけで立身出世を遂げ、民衆啓蒙運動を順調に拡大させてきた。その実体験に照らしてドイツの現体制を高く評価したのであり、またそれゆえ隣国の政変をまだ楽観視できたのだと言えよう。

一年後、1790年1月8日発行の「ドイツ新聞」第1号の記事でもやはり、ベッカーはドイツ諸邦の政府とその国民に対する信頼を失っていない。

ところで、フランス王国の大部分に広がった騒乱の機運は、良い効果をもたらした。すなわち、多くの不平への対策が講じられ、一方で家臣の幸福のために働く我々の良き政府の熱意が改めて活性化され、また他方で、我々が祖国、襲撃すべきバスティーユも、国家財政の破綻を恐れる必要もない我々が祖国への愛がますます大きくなったのだ。(Deutsche Zeitung, Jg.1790, Sp.14)

しかしながらこの発言には、ドイツは自由な国だ、と無邪気に言い切った革命前の報道とは異なる響きも含まれていないだろうか。すなわち、フランス革命を受けてドイツでも何らかの新しい改革に取り組む必要が出てきたことを認めているのである。祖国愛の誇示は、革命はもはや対岸の火事ではない、という危機感の裏返しと受けとることが可能であろう。

1790年2月5日、ベッカーは第三身分の蜂起が国家にいかん甚大な被害を与えるかを述べた後、読

者に対して次のように呼びかける。

自分の祖国がそのような恐ろしい危険にさらされているのを見ようとする者がいるであろうか。たとえ権力の乱用であるにしても、幾ばくかの圧迫を廃止するために、あるいは完成へのゆっくりとした、確実な前進の代わりに、不確かな跳躍をするために。人間と祖国の友が、神と、神の配剤に従うべき良心のまえて、そんなことの責任を負えるだろうか。ちょうど良い時にしか引き起こすことのできない、そんな危険な出来事を、意図的に仕掛けることができようか。

いや、ドイツの愛国者たる者は、自分の祖国において、人間性が快い平和に基づいて存続し続けるように願わねばならない。真の啓蒙は、愛を決して離れることのない伴侶として持つ。啓蒙の光あるところに、血が流れてはならないし、人間に暴力がふるわれてはならない。権力者の啓蒙の欠如が、意味のない思い上がり、国民の他の諸階級が有する品位に対する誤認が、人間の使命と義務に関する無知が、そしてそこに由来する卑劣な自堕落さが、フランスの革命を引き起こしたのだ。そして、庶民の（dem gemeinen Haufen）啓蒙の欠如が、残酷な暴動と殺戮によって革命を損ねたのである。（*Deutsche Zeitung*. Jg.1790, Sp.86f.）^{vi}

すでにこの時点で、ライン地方のカトリック地域で民衆蜂起が起きていると、ベッカーは報告している。不安が早くも現実のものとなったのである。このとき彼は、ようやく革命と民衆蜂起、革命と啓蒙の関係に言い及ぶ。すなわち啓蒙が民衆蜂起と革命を引き起こしたのではない、むしろフランスでは啓蒙が不十分であったために革命が起きた、これに対して啓蒙が進捗しているドイツでは現状維持こそ最善な道だと、彼は必死で訴える。

これに対して、啓蒙されたドイツ人は、喜びをもって見て取るのだ、国家の権力者と貴族が行うあらゆる種類の善行の内に日々の前進を、公立学校がますます改善され、下層市民や農民に対してもお上が直々に啓蒙的な読書を促しているのを。負担が軽減され、貧者の支援が行われ、救済施設を設置されるのを。君主たちがこれまで以上に民衆の友となり、良き主人となるのを。啓蒙されたドイツ人は、自由を求める声がだんだんと喧しく不足について語るのを耳にしているが、この不足を改善するのは、我々と我々の子供たちの課題である。そして啓蒙されたドイツ人は、ドイツの父たちが沈黙を命ずるかわりに、不足に注意を払っていることに気付くのである。それゆえドイツ人は、子供に父へ向ける武器を、兄弟に兄弟へ向ける武器をもたせるような諍いを嫌悪するのだ。人間の幸福を廃墟と死体の上に築くような争いを嫌悪するのだ。（*Deutsche Zeitung*. Jg.1790. Sp.88）

最初の「これに対して」とは、カトリック地域のネーデルラントで、ヨーゼフ2世の改革に対して民衆が蜂起したことを指している。カトリック地域では啓蒙が遅れているために、一揆が起きたのだと、ベッカーは指摘しているのだ。ところが1790年8月、ニーダーラウジッツやザクセンなどのプロテスタント地域においても、しかもベッカーの主たる活動地域たるドイツ中東部を中心に、フランス革命に触発された農民による最大規模の一揆が発生した。^{vii} 慌てたベッカーは、同年のうちに反革命パンフレット『一揆熱』^{viii}を出版する。ここでも彼は、徹底して民衆蜂起の無意味さを説明し、秩序

維持を呼びかけた。民衆啓蒙運動はもはや民衆に合理的な生活術を指南する活動ではなく、民衆に共同体意識を植え付け、社会秩序を守らせることを主目的とした愛国運動へと、完全に変質してしまったのだ。その趣旨が世論に、とりわけ啓蒙市民たちに受け入れられたことは、最初に指摘したとおりである。^{ix}

ベッカーの「ドイツ新聞」が伝えた革命報道は、非常に早い段階から、民衆蜂起の危険性を防止することを狙いとしていた。そして、その手段として彼が次第に強調していったのが、啓蒙主義の維持と保守的愛国主義の育成である。コスモポリタニズムを標榜する啓蒙思想と政治的境界を強く意識する愛国心とは相反するベクトルを持つと理解されることが多いのだが、フランス革命に対するベッカーの反応においては、密接に結びついていたのである。いやそれどころか、愛国心を醸成する手段として啓蒙思想の利用価値はさらに高まったと言えよう。そもそも国家の近代化を目指して上からの啓蒙が推し進められたドイツでは、啓蒙思想はむしろはじめから支配原理に貫かれていた。ベッカーの民衆啓蒙運動の保守化も、その延長線上にある。

3. ナショナリズムの顕在化

社会秩序の動揺を伴う下からの急激な改革要求よりも、啓蒙された権力者による上からの穏やかな改善策に進んで協力し、それを継続させるほうが、遙かに確実な成果をあげられるのだと、ベッカーは信じていた。君主を含め、あらゆる人間が自分の社会的使命を十全に果たすことによって生まれる相互扶助の社会、国父の指導の元で睦まじく協働する大きな家族が、彼の思い描く啓蒙国家であった。それゆえ民衆に対する自制の呼びかけは、ベッカーにとって改革から保守への路線変更ではなく、新しい政治状況のなかでも啓蒙国家建設の取り組みを継続してゆくために必要な緊急対応策であった。つまり彼は態度を翻したのではなく、はじめから民衆啓蒙運動に内在していた体制擁護の基本方針を強調しただけであった。ひょっとすると彼自信はこの対応を、やむを得ない次善策と考えていたのかもしれないが、それはあまり重要ではない。いずれにせよベッカーの民衆啓蒙運動は、新しい政治的文脈の中で生活から政治へと重心を移した結果、農民の境遇改善という本来の目的を見失ってしまったからだ。そして、この重心移動に伴って、ベッカーの国家主義的意識は次第に鮮明になっていったのだ。

1790年代に彼は、『救難便覧』の続編や、『救難便覧』と同じコンセプトで編んだ『ミルトハイム歌謡集』(*Mildheimisches Lieder-Buch*, 1799) など、確かに民衆向けの著作も発表している。しかしそれらは、専ら市民階級の読者によってのみ受容され、評価された。例えば『ミルトハイム歌謡集』は、一種の労働歌となるように企画されたのだが、これを歓迎したのは市民階級の音楽愛好家であった。ベッカーは、もはや農民を相手にした啓蒙家ではなく、市民を相手にしたオピニオンリーダーとなっていた。

ベッカーの右傾化を如実に示しているのは、彼の新聞編集である。当時彼が発行していた「ドイツ新聞、あるいは現代の人間、風習、国家の素描」(*Deutsche Zeitung oder Schilderung der Menschen, Sitten und Staaten unsrer Zeit*)の表題には、1789年に「とりわけドイツの観点で」(*Mit besonderer Rücksicht auf Deutschland*)という文言が付け加えられ^x、さらに1796年末には「ドイツ国民新聞」(*National-Zeitung der Teutschen*)と改称された。他ならぬドイツ人のために新聞を出版しているという意識が、ベッカーの中で次第に先鋭化していったことが表れている。あえて *Teutschen* という

古い言葉を用いたところにも、ベッカーの反動傾向が窺えるであろう。

また彼の発行していたもうひとつの新聞「報知」(*Anzeiger*)は、神聖ローマ帝国の勅許を取り付け、「皇帝勅許帝国報知」(*Kaiserlich privilegierter Reichsanzeiger*)^{xi}を名乗り、官報の役割を担うこととなった。「報知」と「帝国報知」では——「ドイツ新聞」において、ベッカーは自身の民衆啓蒙運動を広報していたのに対し——自分の見解を述べるのではなく、官庁からの通達と読者の投稿をそのまま掲載することを編集方針とした。つまりベッカーの新聞編集は、今や帝国国民の結節点となることを目指すようになったのである。

いやベッカーは、神聖ローマ帝国の外部に住むドイツ人までも射程に収めていた。「帝国報知」の1794年1月31日号に、ベッカーが自ら起草した「ドイツ国民の学識者協会、経済協会、産業協会の、共同活動に向けた包括的連帯の呼び掛け」(*Vorschlag einer Verbindung sämtlicher Gelehrten-Oeconomischen- und Industrie- Gesellschaften deutscher Nation zu gemeinschaftlicher Wirksamkeit*)と題する文章が、掲載されている。^{xii}この中でベッカーは既存の国家体制を地理的にも理念的にも凌ぐ、ドイツ人の連携を提言する。

この協会を構成する、高貴な思想を有したまことに多くの諸身分の慧眼の士、ドイツの非常に多様な国家 (Staaten) に住まう彼らが示した公共精神の実例が、我が国民の不平家たちを改心させ、次のことを納得せしめんことを祈念する。ドイツ帝国の風変わりな政治体制が、すなわち政治的威信と政治的権力の意識が、我々を一つの民 (Volke) に結び付ける紐帯とはなりえないのに対して、我々〔の協会〕は道徳的で遙かに気高い国民意識 (National-Interesse) を持ちうるのだということ。そして部分的には現に、より優れた文化および公益に資する諸学問・技芸の広がり、すなわちヘルベティア人、シュレジア人、プロイセン人までも自分たちと一体にする紐帯を持っているのだということ。とかく利己主義と言われる時代において、真の公共心が示すこの誠に注目すべき実例が称賛ばかりでなく、後に続く熱心な協働を喚起せんことを祈念する。^{xiii}

ベッカーはこの公益団体協会で、文化・学問・技芸という共通項をドイツ帝国、すなわち神聖ローマ帝国の現政治体制よりも、もっと強力に人々を結びつける「紐帯」とし、帝国内の知識人ばかりでなく、当時帝国に属していない地域の人々、政治的には分断されている人々との団結も実現させようとした。注目すべきは、領邦国家の枠組みも、身分の壁も超越して連帯するこの「我々」を、ベッカーがVolkと呼んでいるところである。この語は、もはや彼が啓蒙の対象としてきた下層民や農民を指してはいない。高い国民意識を持ち、公共の利益を担っている知識人たちが、このVolkを構成している。共通の精神文化でまとまるべき人々がVolkであり、そこにはスイス、東プロイセン、シュレジア地方を含めたドイツ語圏全体の人々が含まれるとされている。このVolkには、「民族」という訳語を与えることも可能であろう。ドイツ帝国に「民族」をまとめる力を期待できないのならば、公益団体協会、あるいは「帝国報知」のネットワークを通して、「民族」共通の精神基盤を自分たちで築いてゆこうとベッカーは呼び掛ける。公衆たる啓蒙市民が「民族」をまとめ、「民族」を導くべきだと言うのである。

この公益団体協会の呼びかけには、「ベルリン科学アカデミー」を初めとして、ゲッティンゲンや

マンハイム、ニュルンベルクなどにある有力な14団体が賛意を表明した。ドイツの市民を相互に連絡し、発言力を強めるという目論みは、時代の潜在的要請に応えるものだったのである。^{xiv}ただしこれは、さしあたりドイツ語圏に散在する知識人がより強固に結束することを目指す、いわば内向きの愛国主義と呼ぶべきものであった。政治的実体と求心力を伴わない神聖ローマ帝国への憂国の情がその動機であり、フランスの脅威に対抗する意図は見いだされない。しかしながらベッカーの愛国心は、彼自身がその後フランス占領軍によって逮捕拘禁されたことによって、排外的なナショナリズムに傾いてゆく。

4. ベッカーの拘禁

1811年11月30日朝、ベッカーは、彼を反フランス主義の煽動者と睨んだ占領軍によって逮捕され、マグデブルクにあるフランス軍の要塞に一年半近くも拘禁された。ナポレオンに直訴した妻のおかげで、彼はようやく1813年4月29日に解放され、次いで1814年5月、連合軍がパリに入城した一ヶ月後に、この体験を綴った『獄中記』を発表した。このなかでベッカーは、名望ある啓蒙家として冷静に事件を報告しようと努めている。しかし、随所に滲み出るフランス占領軍とナポレオンに対する憤りは、彼の内向きの愛国心がフランスに対する敵対心に変わっていったことを伝えている。

後に知らされた彼の罪状は、「複数の秘密結社と関係を持っており、それどころかその首領となっている。この秘密結社は、対ロシア戦争の開戦を目前に控えて全ドイツを煽動し、武装してフランス軍を背後から襲おうとしていた」(L&F, S.30)、というものであった。当局はその証拠としてベッカーが関わったと思われる三つの新聞記事を挙げたのだが、そのうち二つ^{xv}はベッカーの出版社から発表されたものの、執筆者は別人だった。しかしもうひとつの記事、「ドイツ国民新聞」1811年2月11日号に掲載された「秘密結社ドイツ連盟」(*Der deutsche Bund, eine geheime Gesellschaft*)は、まぎれもなくベッカー自身が書いたものだったのである。この中で彼は、ドイツ連盟の目標を次のように掲げている。

我が国民の健康と栄誉の増進。その手段として、共同体精神の喚起、誠実と忠実という、かつて我が国民が有していた名声の復活、国語の鍛錬、学問、技芸の完全化、あらゆる分野に関する熟達。また、共同体の幸福を犠牲にしてのみ満たされる偽りの欲求を拒絶し、共同体に害を与える誤用と先入見の数々を排除する。(L&F, S.34)

一見、啓蒙主義時代に数多く存在した市民結社と同じ志を持つ、啓蒙的団体のようにも見える。しかしベッカーは、この「ドイツ連盟」に加入できるのは「ドイツ出身者のみ」(L&F, S.34)と明確な限定を設け、ドイツに生まれた者であるならばザクセン人であろうが、プロイセン人、オーストリア人、バイエルン人であろうが問題ないとしている。つまり「ドイツ出身者」とは、「ドイツ語圏」に生まれ育った人を指すのだと受け取れよう。さらに加入者の義務として、「外国の言葉や言い回し」を使わずに「国語の正確さ、純粹さ、完全さを目指すこと」や、「コーヒーや中国茶、その他外国産の飲み物を日常的に嗜むこと」がないようにすること、「外国産の生地を使った服」を着ないことまで要求している。(以上 L&F, S.37) ドイツ人の愛国心を国力増強につなげるのが民衆啓蒙運動の目標ではあったが、これに対し「ドイツ連盟」は、「外国」の拒絶によって愛国心を顕現させようとし

ているのだ。

ベッカーは常に国民国家を志向し、愛国心によって国民国家を基礎付けようとしてきたのだが、それは排外的ナショナリズムとは異なる意識であった。彼の民衆啓蒙運動が戦うべき直接の相手は、愛国心ないし同胞に対する責任感を持たないドイツ人だったのである。すでに本稿で見てきたように、フランス革命以降でさえも、ベッカーの関心は国内情勢と民衆啓蒙運動の維持継続に向けられており、外国、とりわけフランスを警戒しこそすれ、決して敵愾心を抱いているわけではなかった。おそらくベッカーがはじめて「外国」を敵と見なし、「外国」との差異においてドイツ国家をとらえるようになったのは、ナポレオン軍の侵攻によって、1806年、神聖ローマ帝国が崩壊するに至った段階のことであろう。「ドイツ連盟」の提案を執筆している時、ベッカーには「外国」の産物が、ドイツ人の愛国心を阻害する夾雑物と感じられていたのは疑いようがない。「ドイツ連盟」は、啓蒙精神よりも遙かに強く愛国主義に根ざしている。より正確に言えば、啓蒙主義的言説によって合理主義の装いを施された愛国団体である。そこで行われるのは、下層民、民衆としてのVolkに対しての啓蒙ではなく、民族としてのVolk、ドイツ語圏の精神共同体を育成するための啓蒙に他ならない。

さすがにベッカーは、この過激な提案を自分の意見として公言することはできなかつたため、匿名の投稿を装って発表した。つまり彼は、この記事がフランスを敵に回すアジテーションであり、これによって反乱首謀者とみなされる可能性を、充分予測していたのだ。『獄中記』においてベッカーは、フランス軍による逮捕が全くの不意打ちであるかのように描いているが、決してそうではない。当時フランスの「高等警察」はドイツの言論界全体への監視を強め、あらゆる出版物が検閲に晒され、数多くの新聞が廃刊に追い込まれていた。そればかりかニュルンベルクで「屈辱の深みにあるドイツ」(*Deutschland in seiner tiefen Erniedrigung*)と題した反ナポレオンのパンフレットを発表した書籍商パルム (Johann Philipp Palm) が1806年8月26日に銃殺刑に処せられるという事件も生じていた。いかにベッカーが楽天的性格であったとしても、自分がジャーナリストとして置かれていたこのような危険な立場を認識していなかったとは考えられない。すなわちベッカーは確信犯的に外国文化排斥を提案したのだ。

民衆が知らされるのは「ただ群衆を追い立てる唯一者に対する服従の義務」(L&F, S.188)についてだけであった、とベッカーは憤る。このとき彼は、言論の自由を奪われた啓蒙ジャーナリストとしてというよりも、外国の占領政府から不条理な扱いを受けたひとりのドイツ人として憤っている。

ドイツ人の如き民が、外国の頸木の元にこれほど深く屈従することがあったなどとは、後の世にはほとんど信じ難いであろう。この恥辱からの救出だけでもう、目下の諸国民戦争の高き目標に到達するために、祖国の自由と独立のために、ヨーロッパのあらゆる民族の人権のために、血の最後の一滴まで賭けて戦う価値がある——それはフランス民族のためでもある。(L&F, S.192)

ベッカーは、「[フランス] 民族に対する国民憎悪 (Nationalhaß) を胸に育まぬよう」(L&F, S.182) 心掛けていたと証言する。責任はフランス人一般ではなく、独裁という政治体制に帰せられるのだと主張することで、彼は啓蒙家としての矜持を保とうとしたのである。おそらくベッカーが獄中にあっても理性的な態度を毅然として貫いたことも、普遍的人権の侵害に義憤を感じ、そのために身を賭して戦おうとしたことも事実であろう。それでもなお、彼がドイツ人としての感じていた民族的恥辱の

感情は、隠し切れない激しさを持っていた。彼の言い分とはむしろ逆に、先の引用箇所からは、牢獄に閉じこめられた彼の胸中に「国民憎悪」が押さえがたく沸き上がって来たことが、生々しく伝わって来る。

さらに興味深いのが、ベッカーが獄中で考えたことである。当初書くものも読むものも与えられなかった彼に許されたのは、空想で時間をつぶすことだけであった。

私には、このように想定する資格があった。すなわち私の逮捕が、かくも大規模な武装をもって行われ、そのうえ不正な処刑という結果に終わるのならば、それはドイツ人の心になお一層強い印象を与えるだろうと。外国の鎖につながれて眠るドイツ人の心を目覚めさせ、自由を求める感情と国民精神を強め、フランスの頸木からの脱却する瞬間を——過酷な非人間的弾圧にあって必ずやそうなることだろう——早める助けとなるだろうと。

この考えが私に、恐れることなく死を直視し、ドイツ男子として立派に最期を迎える勇気を与えた。[……]

別の、しかしもっと危険な楽しみの源を作ったのが、可能性と文学の王国において空想を巡らすことであった。私は一日中ばかばかしい妄想にかかずらい、妄想の糸を次から次へと尽きるまで紡いでいった。例えば、アラジンの魔法のランプや、フォルトゥナートゥスの財布と魔法帽を手に入れることができないかと考えた。それらを使って人類のためにどんな奇跡を為そうか、それをどんな具合に行うべきか、さらには地上の神々の前に出現し、天上の秩序同様に治めさせるよう、ひとりひとりに厳命を与えている様子や、どうやったら驚かせることなく私の家族の前に姿を現せるか、などと真剣に思いめぐらしたものである。私はしかし、びっくりして直ぐに気が付いた。自分の作り出した世界で力を持つことの過度の刺激が、現実の世界においては容易に精神錯乱へとつながりうることを。(L&F, S.24f.)

奇しくもベッカーは、彼の処女論文「いかなる形であれ民を欺くことは有用でありうるのか、という問いへの回答」において「誰もが妖精と幽霊のメールヒェンを好み、魔法のランプとフォルトゥナートゥスの財布を手にしたと思うものだ。理性がどんなに強く文句を言おうとも、我々の自己愛を唆すそのような奇跡と妄想の産物に、我々は思わず知らず惹き付けられてしまう」^{xvi} のだと警告していた。ところが自由も名誉も紙もペンも奪われた時、無意識のうちに自ら民衆本に慰めを求めてしまった、と彼は『獄中記』に記している。このように告白した彼の意図は、処女論文を執筆した時と変わらず、「可能性と文学の王国」の危険性を示すことにあったと思われる。しかしながら、たとえ一時的にせよ古い民衆文学の世界が——「ドイツ男子」としての誇りと同時に——彼の心を占めたことは、きわめて意味深い。ベッカーは、労働するVolkに潜在する力で、形骸化しつつあるドイツの啓蒙主義を矯正しようと試みた。また神聖ローマ帝国の結束力の弱さを憂い、ひとつのVolkとして団結するよう、ドイツ語圏の知識人へ呼び掛けた。そして今、自らの尊厳と生命の危機に瀕する彼が欲したのは、またしてもVolkであった。今度はしかし、啓蒙に努めるVolkでも、愛国心に燃えるVolkでもなく、迷信の世界に生きるVolkの文学が、彼に希望を与えたのである。しかも、この「精神錯乱」から醒めた後に、彼はもっと害のない暇潰しのために「ドイツ語の構造と、先史におけるドイツ語の形成を統べていた哲学的精神に取り組んだ——その言語学的学説も法則もまだ存在しなかったからで

ある」(L&F, S. 27f.) と言う。理性を取り戻したベッカーは、啓蒙主義運動の将来について考えても良かった。ところが彼が次に思いを馳せたのは、いにしえのドイツだったのである。

確かにベッカーは、どんなに屈辱的な仕打ちを受けようとも、啓蒙家としての自制心を保とうとした。しかしそれ以上に彼は、ドイツのVolkに所属する者として思考していたというべきであろう。フランスによって逮捕監禁されたベッカーを支えたのは、ドイツ人の気高い「国民精神」、古い民衆本の世界、そしてドイツ語であった。それらの総体が、『獄中記』におけるVolkである。このVolk像、すなわちドイツ人の精神、文化、歴史が投影されたVolk像は、既にロマン派のそれに限りなく近づいたナショナルスティックな姿をしている。そこにはしかし、ベッカーが啓蒙によって救い出そうとした現実の下層民、重労働に明け暮れる農民は、もう含まれていなかった。彼自身のVolk観の変化は、彼の民衆啓蒙運動が農民に対する人道的活動から、市民階級を対象とした愛国運動へと、本人の十分な自覚がないままに変節したことを物語っている。ドイツ・ナショナリズムのひとつの源流が、ベッカーの民衆啓蒙運動から流れ出していたのである。

注

平成22-24年度科研費若手研究 (B) 「ドイツ民衆啓蒙運動による文化革命——〈Volk〉と民衆文学の価値転換——」(研究代表者・田口武史、研究課題番号22720138) による研究成果の一部。

- ⁱ この新聞の正式名称は「ドイツ新聞、あるいは現代の人間、風習、国家の素描」(*Deutsche Zeitung oder Schilderung der Menschen, Sitten und Staaten unsrer Zeit*) である。1000部から2000部ほど発行され、当時としては決して少なくない読者を獲得していた。なおこの新聞からの引用は、引用箇所後に (*Deutsche Zeitung*, 発行年, 頁数) の形式で出典を示す。
- ⁱⁱ ハーバーマスが指摘したように、まさしくこの時代に新聞や雑誌などの印刷物を介した市民相互のコミュニケーションが発達し、「世論」が形成されることとなった。Vgl. Habermas, Jürgen: *Strukturwandel der Öffentlichkeit*. Frankfurt a.M. 1990. ベッカーは自身の著作物を書店に託すのではなく、自ら立ち上げた出版社で自分で販売した。その際彼は、市民階層の情報網を効果的に利用して一気に著作を普及させ、民衆啓蒙運動に対する「世論」の支持を集めたのであるが、これは印刷物の作り出す公共圏の存在によって可能であったと同時に、公共圏を拡充する役割も果たした。著述家自身が運営する出版社を初めて商業的に成功させた点で、また書物を大量流通させる仕組みを作り上げた点で、ドイツ出版史における彼の功績は大きい。マスメディアの社会的影響力をいち早く認識していた人物のひとりとして評価される。拙論「「教養人による「民衆」の発見——啓蒙主義末期の民衆本『農民のための救難便覧』について——」日本独文学会西日本支部『西日本ドイツ文学』第15号、103-118頁参照。
- ⁱⁱⁱ Becker, Rudolph Zacharias: *Rudolph Zacharias Beckers Leiden und Freuden in siebzehnmonatlicher französischer Gefangenschaft von ihm selbst beschrieben. Ein Beytrag zur Charakteristik des Despotismus*. Gotha 1814. 以下『獄中記』と略記する。なおこの著作からの引用は、引用箇所後に (L&F, 頁数) の形式で出典を示す。
- ^{iv} そもそも「ドイツ新聞」は、教育家クリスティアン・ザルツマンが設立したデッサウの汎愛学校 (Philanthropin) の広報紙「青少年とその友のためのデッサウ新聞」(*Dessauische Zeitung für Jugend und ihre Freunde*, 1782-1787) 前身としている。この新聞を一人で編集していたベッカーは、1787年に汎愛学校を退職したが、独立した編集者兼経営者として引き続き新聞発行に携わった。「ドイツ新聞」は、情報伝達よりも道德教育に重きを置いた編集方針を、「デッサウ新聞」から受け継いだのである。
- ^v Vgl. Campe, Joachim Heinrich: *Briefe aus Paris zur Zeit der Revolution geschrieben*. In: Günter, Horst (Hg.): *Die Französische Revolution. Berichte und Deutungen deutscher Schriftsteller und Historiker*. Frankfurt a.M. 1985, S.9-102.
- ^{vi} フランス革命やオランダの反乱などが、啓蒙の結果として引き起こされたのではなく、誤った啓蒙、もしくは啓蒙の不足に起因しているという主張は、J. L. エーヴァルトの著作『民衆啓蒙、その限界と利点』(1790) にも見られる。エーヴァルトは支配者階級に向けてこの理論書を書いたのであるが、主張内容はベッカーのそれとほぼ同一である。なお、「民衆啓蒙」(Volksaufklärung) という用語は、彼が初めて用いた。Vgl. Ewald, Johann Ludwig: *Über Volksaufklärung, ihre Grenzen und Vorteile*. Hg. von Jörn Garber. Königstein/Ts. 1979, S.116-158. (Unveränd. Nachdruck der 1. Auflage. Berlin 1790)
- ^{vii} Vgl. Berding, Helmut (Hg.): *Soziale Unruhen in Deutschland während der Französischen Revolution*. Göttingen 1988.
- ^{viii} Expedition der Deutschen Zeitung [Becker]: *Das Rebellions-Fieber, wie solches der Pastor Wohlgenuth in einer Rede beschrieben, die er an die Männer und Bursche in Mildheim gehalten, als sie ausmarschiren wollten, sich mit den Rebellion zu vereinigen. Aus dem zweyten Theil des Noth- und Hülfsbüchleins besonders abgedruckt*. Gotha 1790.
- ^{ix} 拙論「R. Z. ベッカーの民衆啓蒙運動における政治意識 —フランス革命以前・以後—」松山大学『言語文化研究』第29巻第2号、67-90ページ参照。

- ^x Vgl. Siegert, Reinhart: *Aufklärung und Volkslektüre: exemplarisch dargestellt an Rudolph Zacharias Becker und seinem >Noth- und Hülfsbüchlein<. Mit einer Bibliographie zum Gesamthema.* Frankfurt a.M. 1978, Sp.752.
- ^{xi} この新聞の正式名称は以下のとおり。「皇帝勅許帝国報知。あるいは法、政治 [ポリツァイ]、ドイツ帝国のあらゆる市民的職業のための、ならびにあらゆる種類の公益事業に関する読者の開かれた対話のための一般広報誌。ローマ皇帝のこの上なく恵み深い承認と自由を備えて」(*Kaiserlich privilegierter Reichsanzeiger oder Allgemeines Intelligenz-Blatt zum zum Behuf der Justiz, der Polizey und aller bürgerlichen Gewerbe im Deutschen Reiche, wie auch zur öffentlichen Unterhaltung der Leser über gemeinnützige Gegenstände aller Art. Mit Römisch- Kaiserl. Allergnädigster Genehmigung und Freyheit.*) 以後「帝国報知」と略記する。
- ^{xii} 同じ文章が、その反響に関する報告とともに「帝国報知」第一巻（1794年1月31日）に再録されている。Vgl. Becker (Hg): *Reichsanzeiger.* Bd.1. (1794), Sp.241-250.
- ^{xiii} Becker (Hg): *Reichsanzeiger.* Jg.1794. Bd.1, Sp.250.
- ^{xiv} オットー・ダンはこの「帝国報知」をフランス革命への反発としてとらえ、「ドイツにおける全ての愛国的結社の結集のための機関誌」と位置付けている。オットー・ダン『ドイツ国民とナショナリズム』末川清他訳、名古屋大学出版会、1999年、41頁参照。
- ^{xv} 「ドイツ一般報知」(Allgemeiner Anzeiger der Deutschen) 1811年1月7日号に掲載された『『消えるインク』の製造法に関する質問とその回答』と、雑誌「ヤーゾン」(Jason) 1811年11月号に掲載された「ホーエンシュタウフェン朝におけるドイツ・イタリア変革史」がその二編である。なおベッカーは嫌疑が懸けられた三つの記事を『獄中記』に再録し、身の潔白を示そうとした。
- ^{xvi} Becker: *Beantwortung der Frage: Kann irgend eine Art von Täuschung dem Volke zuträglich sein, sie bestehe nun darinn, daß man es zu neuen Irrtümern verleitet, oder die alten eingewurzelten fortdauern läßt? Eine von der königlichen Akademie der Wissenschaften zu Berlin gekrönte Preisschrift, mit einer Zueignungsschrift an das menschliche Geschlecht. Teutsche, verbesserte und mit einem Anhang vermehrte Ausgabe.* Leipzig 1781, S.88.